＜＜東北魂＞＞を鼓舞する
電子新聞

発行所　株式会社遊無有

〒 190-0013
東京都立川市富士見町 2-12-13　安藤ビルB１F
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第 10 号

毎月発行

創刊 2013 年（平成 25 年）3 月 16 日　土曜日

２０１３年（平成２５年）３月１６日　土曜日

シリーズ　東北大震災と宗教を考える ②

『郷土の祭礼と宗教と復興』

被災地の祭礼は誤解されている
「宗教色の希薄なお祭」と
「被災地の祭礼」は別物

被災地祭礼復活

東北大震災発生直後の被災地において、衣食住もままならない状況で、代々継承されてきた地元の祭礼を復活しようという動きがあちこちで起きた。実際に、獅子舞、虎舞、あるいはしし踊り、神楽、その他の祭礼の数多くが復活したし、いまも復活しようとしている。

こうした動きに対し、自粛ムードが支配的だった空気を受け、他の地域からは、お祭などをしている場合ではない、なぜいま再開するのかという声が上がった。お祭よりも優先すべきことがあるだろうと。

この大震災発生までは、地域ごとの閉じた環境のなかで祭礼は代々受け継がれてきた。それが震災後に、あちこちで復活のニュースとして大きく取り上げられたが、これまで他の地域ではその存在さえほとんど知られてこなかった。そのため、数多くの祭礼が突如として出現するといった様相となった。

その数は、祭礼に詳しい専門家でもすべてを掌握しきれていない。岩手・宮城・福島沿岸部だけでも約八〇〇件が判明しているが、この三県の内陸部を合わせたら、さらに東北六県では、全国規模ではいくら存在するのか誰も知らない。

「宗教色希薄な祭」と「被災地祭礼」

最初にはっきりさせなければならないのは、「宗教色が希薄な祭」と「被災地祭礼」は別物ということである。いま日本中に祭ブームが起きているが、そうしたブームに乗った祭と被災地祭礼が同じ「祭」とひとくくりにされることから誤解が生じる。その区分の定義は何かと論じるより、左記の写真を見ればすぐ分かる。

この写真は岩手県大船渡市の「金津流浦浜獅子躍」を撮影した動画から静止画に許可を得て加工したものである。一昨年十一月に浄土真宗の宗祖親鸞聖人の七五〇回大遠忌法要を記念して行われた「西本願寺音舞台」で、大震災被災者への追悼の想いをこめた躍りを披露したことで一躍有名になった獅子躍である。

よく被災地の祭礼は神事であり仏事と言われる。これらの写真は一般民家の庭先での門付けであり、老齢のご婦人が位牌とともに祭礼を見ている。震災発生前の写真であり、この震災で意味づけが変ったということではないのだ。もとからそうであり、獅子躍の説明文に、ちゃんと先祖供養と海で亡くなった人の慰霊をするとある。

東北大学東北アジア研究センターシンポジウム…『民俗芸能と祭礼からみた地域復興』

もうひとつ被災地祭礼についての話題を紹介する。二月二三日、宮城県仙台市にある東北大学片平キャンパス・さくらホールで、東北大学東北アジア研究センターシンポジウム『民俗芸能と祭礼からみた地域復興』が開催された。このシンポジウムは、宮城県地域文化遺産復興プロジェクトの事業の一環で文化庁の補助事業でもある。

参加者は、研究者や民俗芸能関係者がほとんどかと思いきや、一般市民もたくさんいたように思われ、一般公開にしたことはとてもよかったと感じた。

コメンテーターは、文化人類学研究や宗教学研究、民俗学研究の各分野の大学関係者、このプロジェクトに参加した学生、文化財保存に関る行政関係者、そして民俗芸能保存会の会員などであった。

民俗芸能と祭礼という観点からみた復興というテーマは新鮮であり、開催前から楽しみにしていた。各コメンテーターの多くは、実際に被災地に入り、被災者への聞き取り調査をしてきた結果を分析してまとめていた。

民俗芸能が被災者を結びつける意味とは

正直なところ、すべてのコメンテーターは時間が足りず、深いところに突っ込んでいく迫力に欠けていたという印象が残った。

仮設への移転や遠く避難してバラバラになった元住民である被災者たちが一堂に会するきっかけになっている地元の祭礼という位置づけは、この問題の入り口であり、そこから深く切り込んで行く考察を聞きたかった。近年の郷土祭礼が置かれている位置、少子高齢化などにより継承する人々の不足、ある意味での形骸化などに注意が注がれるあまり、問題の本質を見失っているのではないか。

なぜ、衣食住にも困っている被災者が、獅子舞で元気を取り戻すのか、なぜ被災者がその獅子舞を見て涙を流しながら踊り出すのか、そうした点にもっと突っ込んでいって欲しかった。生命を鼓舞する何かがあるから、衣食住も忘れ没頭するのではないか。それを見過ごしては本質には迫れない。無形文化財として残すのも大事だが、なぜ残すのかを考えずに残すことの意味は何だろうと考えた。

被災地の祭礼を過小評価してはいないか

郷土の祭礼が、土地を離れざるを得なかった被災者を被災地につなぐことの不思議さを言う研究者がいたが何も不思議ではない。代々受け継がれてきた歴史の中で、海難、大災害もあり、不幸にも亡くなった家族・先祖も供養するのがこうした郷土の祭礼なのだ。

この金津流浦浜獅子躍のいわれにもあるが、仏教伝来以前からあるらしい。ということは神事、仏事と分化する以前から、宗教儀式であったのだ。それからすればすでに千年という時間、代々その地域に受け継がれてきた宗教儀式なのである。

復興の先進的支柱に

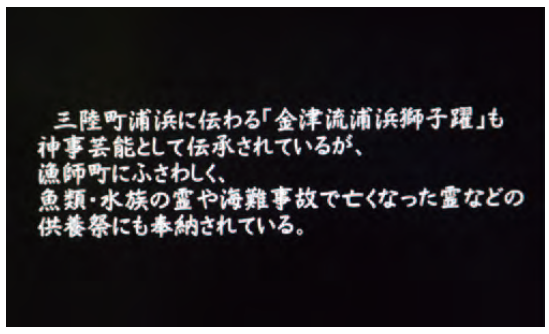
筆者は、もっとこの郷土の祭礼は、この震災を乗り越えるのにより大きな役割を担って当然だと考える。

犠牲者を弔うこと、その悲しみを乗り越えること、この震災というものを真正面から受け止め乗り越えること、復興に向け奮起すること、被災地となったその地域からパワーをもらうこと、こうしたすべてをこの祭礼は備えていると思う。だから、もっともっと積極的に意味づけを与えるべきだと思う。

またこの震災を機に、一部形骸化した祭礼に再度魂を吹き込むことである。そして新たに復活する祭礼とともに復興に突き進んでいくことである。さらにいうなら、宗教心を忘れた日本人に宗教心を取り戻すきっかけを与えることもある。

【金津流浦浜獅子躍門付け風景】

位牌とともに家族で供養



東北大学東北アジア研究センターシンポジウム

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

これからの復興活動を考える

映画『津波のあとの時間割～石巻・門脇小・1 年の記録～』（青池憲司監督）を見て思うこと

ドキュメンタリー映画『津波のあとの時間割～石巻・門脇小・1年の記録～』

三月三日（日）、東京はポレポレ東中野で【映画『津波のあとの時間割～石巻・門脇小・1年の記録～』】を見た。前々から見たいと思っていたが、ようやく見るチャンスが来た。また、この映画を撮った監督の青池憲司氏にもお会いしてお話ししてみたかった。

3・11では東北の太平洋沿岸の多くの学校が津波に襲われた。映画の舞台となった宮城県石巻市立門脇小学校も壊滅的な打撃を受けた。児童三〇〇名のうち七名が犠牲になり、校舎は津波と火災で使用不能となり、その一帯もほとんどが荒野と化したという。

震災直後の四月には高台にある中学校に間借りして新学期を迎え、「よみがえれ石巻」と題した授業で児童たちは今後の町づくりに意見を出し合っていたという。そこに震災と向き合うこどもたちの姿があった。また、地域でも生活とコミュニティの復興を目指して住民と行政の意見交換が続いていった。

そのような、教室と地域、子どもと大人たちの再生の日々を、石巻の四季とともに撮り上げたドキュメンタリー映画であり、石巻門脇小学校という「定点」における「震災と向き合ってきた定点観測」でもある。

明るい顔の子供たち

涙を見せない明るい子供たち

前記のように、この小学校からも犠牲者が出ている。この地区でもかなりの犠牲者が出ている。当然ながら身内や親戚、知人に犠牲者のいる子供も多いはずだ。またあのとき体験した津波のショックはどれほどのものだったであろう。それはその場にいなければ共有できるものではない。

それなのに、子供たちは涙を見せることはない。みな明るい。教師も子供たちの明るい表情しか見ていない。筆者は、その明るすぎる表情に子供たちのけなげさと体験の悲惨さを想像する。映画を見ているうちにあの津波を共有していない筆者の方が泣けてくる。

「忘れない」という言葉があるが、この石巻の子供たちが忘れるわけがない。忘れかけているのは当事者以外である。

そして、3・11からもうすぐ二年になるが、子供たちはあのショックを真正面から受け止める時期がまだ来ていないと思う。真正面から向き合うにはもっと時間が必要だし、ショックを伴う生々しい感情を誰かに吐き出すにはふさわしい環境が必要だと思う。何もそれを急ぐ必要はない。

それだけではない。子供たちは、親や地域の大人たちからこれからの地域の復興の困難さについてもたくさんのことを聞いているだろう。そのため、自分だけが震災ショックを解消するために心情を吐露する「わがまま」が許されないと思っているのかもしれない。

映画上映後のトーク風景

それはあくまで筆者の想像の域を越えるものではないが、子供とは大人が思う以上によく事情を知っているものであり、だからこそ遠慮もするのではないか。

青池監督とのお話

映画の後にはトークもあり、その後はホールでのお話し、それでもまだ足りない人に監督がわざわざ時間を割いてお茶を飲みながらの歓談もあった。監督はつい二-三日前まで石巻を訪問されたということで、そうした近況もお聞きすることができた。

震災直後は直接的な衣食住の「目に見える不安」だけであった。しかし、監督が言われるように、いまは漠然とした「目に見えない不安」がどんどん拡大して被災者を飲み込んでいこうとしている。

それだからこそ、トークでも出ていた「想像力」で被災者に寄り添う姿勢がみなに求められているのだと切に思う。

だからまず映画を見よう。そして監督といっしょにこれからの復興、これからの子供たちの解放を見守って行こうと呼びかけたい。

これからの被災地の厳しい状況

筆者も石巻の復興状況についてはその都度情報収集を行ってきた。それは非常に厳しいものである。

まず、石巻の復興はどんどん遅れる一方で、さまざまな支援策がこの二年の節目を境に消えていく。震災直後からの緊急支援措置がこれから徐々に解除され、被災者は厳しい環境下での自立を迫られていく。

最初に来るのは仮設住宅退去に伴う問題、生活資金獲得問題、雇用確保、企業再建の進展状況、移住やどこで暮らしていくかの問題、被災した住宅地の買上問題、新たな住宅建設に伴う二重ローン問題、住民合意形成の困難さ、地域の政治状況など課題山積で、他方、震災発生以降二年間の精神的身体的な疲労も蓄積している。しかも良いニュースで慰められることもない。こうなるともう個人の努力では如何ともしがたい。

いま被災地を取り巻く状況はこうした筆舌に尽くしがたいものである。その一方で、忘れられ、一部には復興が徐々に進んでいるという情報まで撒き散らされる。このギャップにも苦しんでいることだろう。

阪神淡路の教訓

実は、青池憲司監督は阪神淡路大震災についてもドキュメンタリー映画を撮られている。そこで、たまたまよそで聞いた阪神淡路大震災の三年後の状況についての噂についてお聞きした。その噂によると、震災被害の甚大であった神戸市長田地区では、震災発生の三年後には住民同士の利害の対立が表面化し、激化し、とてもボランティアなどが立ち入れる状況ではなくなったという。弾き飛ばされるように撤退した団体も多かったという。また区画整備や住宅整備事業できれいになり、高層マンションや店舗の高層化も図られたが、結局は人が減少し、空き家が多数発生したという。

筆者はこの噂を聞いて、東北はどうなるのか想像するのも恐ろしかった。ある意味で東北の方がもっと状況的には厳しい面があるからである。住民同士が激しく対立するようでは、いまにどうにもならなくなる状況が来るかもしれない。

監督にはこの質問に後日メールでお答えいただいた。

それによると、そうした事例はごく一部であり、直接目にしたことはないとのことだった。これをお聞きして少し安心した。

とはいえ震災三年後が大きな節目だと思う。いまから、遅れていた復興が端緒につくのか、それともさらなる悲劇に見舞われるのか、東北被災地だけでなく、日本が問われているのだ。

http://www.shinsaihatsu.com/org/aoike-miyagi

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」その③

「地名研究から古代東北のイメージを覆す—地名研究家・太宰幸子氏・前編」

次々に湧き起こる興味

前回は日本刀のルーツが東北にあることをさまざまな証拠をあげて示した。従来の定説や常識を打ち破り、きっと多くの読者を驚かせたことであろう。しかしそれを知ったことで、そこからさらに古代東北についていろいろと掘り下げたいとも思われたことだろう。

筆者もあれからいろいろ知りたいことが出てきた。好奇心に火がつき、好奇心のかたまりになった。まるで子供のように次々に、「それから」「なぜ」「どうして」という興味と疑問が湧き起こるのを止められない。

たとえば、

（ア）日本刀鍛冶集団が「舞草鍛冶」、「月山鍛冶」、「玉造鍛冶」の三箇所にあったということだが、では「たたら製鉄」拠点はどれくらいあったのか

（イ）原料は砂鉄か鉄鉱石か

（ウ）またどちらが優れているのか

（エ）東北には鉄鉱石を鉄素材として加工する技術はあったのか

（オ）ひょっとして東北は当時の製鉄の大拠点だったということか

（カ）それはなぜか

（キ）たたら製鉄の職人とはどういう人たちだったのか

などの疑問が次々にわいて来た。

そうした疑問をぶつけてみたいと、この「埋もれた東北文化を掘り起こす旅」の第三回を迎えようと思ったのである。

太宰幸子氏

プロフィール

一九四三年宮城県大崎市鹿島台生まれ。
日本地名研究所会員、宮城県地名研究会会長、東北アイヌ語地名研究会会長、みやぎ街道の会顧問
編著書・共著　『『要害』地名調査研究報告書」（宮城県地名研究会）、「金属と地名」（三一書房）、仙台江戸学叢書14「仙台城下の地名」（大崎八幡宮）、「民俗と地名・俘囚と九州」（熊本地名研究会）、「災害・崩壊地名—地名にこめられた祖からの伝言」（宮城県地名研究会）、「北上川下流の水山」（国土交通省北上川下流事務所）など。『『要害』地名調査研究報告書」で二〇〇八年、日本地名研究所・地名研究賞受賞。

地名研究家・太宰氏

前置きが長くなってしまった。

今回の訪問先は、地名研究家の太宰幸子氏の取材である。仙台駅で東北本線に乗り換え、三〇分ちょっとで鹿島台駅に着いた。寒風のなか、前日に降り積もった雪を踏みしめてご自宅を訪問した。

当日は、前々回号で取材させていただいた宮城県大崎地方を拠点とする「大崎タイムス」の佐々木氏との共同取材のような、三人での座談会のようでもある奇妙な形になった。そのおかげで、話題が広がり、飛び回り、また深まり、より刺激的な取材となった。

太宰氏は、宮城県地名研究会の会長などをされ、日本地名研究所にも所属されている。以前は舞草刀研究会にも所属され、多くの研究論文を寄稿されている。カバーされる研究範囲は筆者の知る限りでもかなり広い。地名研究をはじめとして、アイヌ語地名研究、舞草刀をはじめとした古い東北の刀剣や東北の刀鍛冶たちの研究、俘囚と呼ばれた東北の人々が移配させられたことに関する研究、鉄文化の伝来研究、地名による災害地研究などで、範囲は広大である。

二〇一二年二月には『みやぎ地名の旅』という書籍を出版され大きな話題を呼んだ。

また取材訪問直前には、この東日本大震災で被災した宮城県沿岸部と地名の関係をまとめた書籍が上梓されたところであった。祖先はしっかり地名という形で津波被災について警告していたのだ。そうした警告はこれからもしっかりと子々孫々に語り継ぐべき遺産であると思う。

その本が、震災から一年九ヶ月経過した二〇一二年の大晦日に『地名は知っていた・津波被災地を歩く』上下巻として河北出版センターより出版された。

四時間にも及ぶ取材

取材前には、この取材に確保した時間もたっぷりと三時間であった。これくらいあれば、十分すぎるほどだろうと思った。結局は足りなくなってしまうのだが、訪問前はそれだけあればどんな事態にも対応できると思っていた。むしろそれ以上長引く取材はご迷惑だろうし、第一失礼だろうと思っていた。しかし、実際の取材は約四時間という長時間であった。

取材は、驚きの連続だった。定説や常識が次々に破壊されていく。後ろの予定がなければ、あやうくエンドレスの取材になるところであった。

取材時間の長さだけの問題ではない。話題はかなりの広範囲に亘った。多少予習していったものの、次々に知らないことが出現し、お話の途中で分からないことが出現するたびに、いちいち初歩的な説明を受ける状況だった。それでも、不明な点は多々ありつつ保留しながら、よろよろと何とかお話についていく状況であった。

こうした取材であったので、一回の記事にあまりに多くのことを詰め込んで消化不良の記事になるのは避けたいと思った。それではダイナミックさに欠け、面白みもない記事となる。いろいろ悩んだ結果、やはり一回分の記事にするには多すぎる内容であると判断し、前編・後編の二回に分割してお届けすることとした。ご容赦願いたい。

しかし、前編部分だけでも読者の常識は何度も覆されることになろう。

古代日本を調べる手段は限定されている

あらためて古い時代を調べる手段を考えると、意外に少なく、その情報量も限られている。

文献にしても、数も情報量も限られており、結果、文献を通して古い時代の文化や歴史が後世に伝わることはまれである。しかも特定の権力者を中心とした情報に限定されるのが常である。そのため同じ文献が何度も登場することとなる。

文献が比較的残されているのは一三〇〇年ごろに著された歴史書である『吾妻鏡』以降であるという。その取り上げた時代は、一一八〇年以降である。それ以前は文字資料が極端に少ないという。したがってそれ以前の歴史を遡る手段としては文献はあまり有効とは言えない。まずこれを聞いて筆者の常識は根底から覆った。

日本に漢字が伝わったのは約二千年前と言われているのに、『吾妻鏡』のような歴史に関する文献が数多く著されるようになったのが漢字伝来から実に約七百年経ってからだというのだ。

また家系を調べるのに墓石という方法も考えられるが、これも石の墓が一般化するのは江戸後期ぐらいからであり、余程の権力者でないと石墓は建てられず、庶民は、石を置いたり木の柱を建てる程度の墓がほとんどであり、墓地も定まっていなかった。木材はすぐに腐食する。したがって、この墓を手がかりに歴史を遡る方法にも限界がある。

考古学的な発掘調査もあるが、たまたま建設工事で遺跡が発見されてから発掘するケースがほとんどであり、偶然の産物である。いったい遺跡のうちの何パーセントがこうした幸運に恵まれるのかを考えると暗澹たる気持ちになる。しかも発掘は形のない文化などの復元にはあまり向かない。

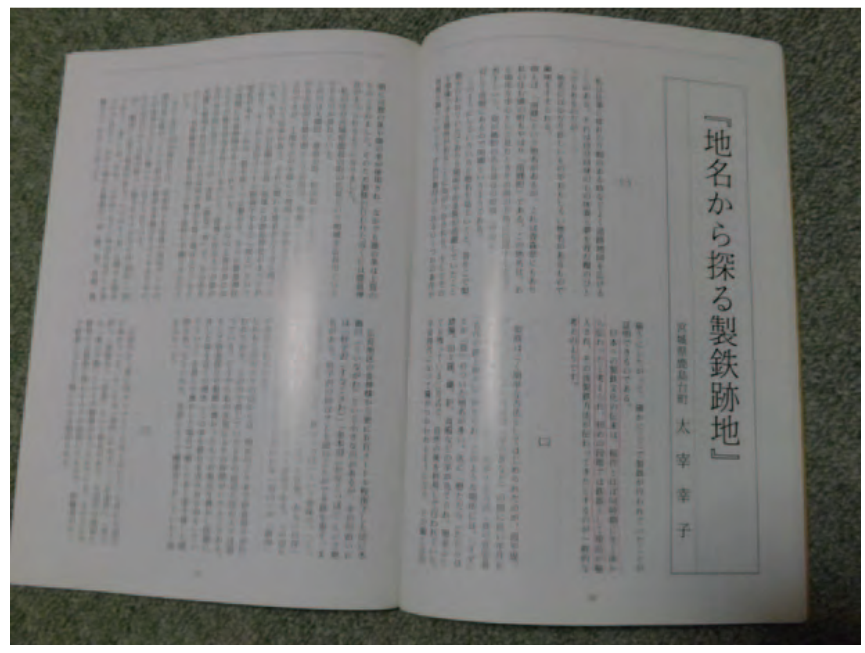
そうなると、文献もない、有力な権力者もいない、発掘調査もあまりないところだとしたら、その地域に関する研究は、十分な手がかりがなく頓挫してしまう。

地名が教えていることは

このように、ある地域に関する文献が極端に少ない、あるいは存在しない場合にはどうするか。地名がそれらを知る手掛かりになるという。

まったくの素人には想像もつかなかったが、その土地の地名からは多くの情報を得ることができるという。地名に込められ、伝えられてきた事柄は、研究者の目からするとたくさんあるという。むしろ文献以上の情報が地名には詰め込まれている場合も多い。

例えば、ものすごく古い地名であれば、数百年、千年以上の間に、水害や土砂崩れ、開墾、開発などで土地の形状そのものが変化している場合がある。そんなに古ければ文献も残っていない場合が多いし、あったとしても新しい時代の文



「地名から探る製鉄跡地」
舞草刀研究会　第二号

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

献の可能性が高い。

しかし地名を調べればかつてその地域がどのような土地であったのかの情報をもたらす。かつてその土地で産出した鉱物資源がどういうものであったかも推測できる。あるいは、かつてそこにどんな人々が暮らしていたのかも分かる。どんな災害があったのかも分かる。

そのように、歴史、産物、地形、災害などが地名から分かるのである。さらにそれを起点にして、派生的なさまざまな情報にも発展するのである。そこから当時の状況が活き活きと蘇ってくるという。

宮城の鉄の歴史

『みやぎ地名の旅』という本は取材前に読んでいた。そこには、地名からすると、金属産出に関連した地名が宮城県内一帯にくまなく分布しているということだったので、太宰氏に直接確認してみた。学校教育ではそうしたことを教えられたことは一度もなかった。

やはり間違いない。それどころか、宮城の古代は、涌谷からの天平産金や国司が百済王敬福であった時代があったことから、朝鮮半島と密接な関係があったということまで教えていただいた。それに関連して、小説家で日本古代史も研究した金達寿氏の著作も教えていただいた。半島出身の方が実際にその土地を取材して書かれた本であることがとても貴重だという。まだ読んではいないが、非常に楽しみである。

現地取材は骨が折れるし、時間もかかるが、現地に取材する大切さも教えていただいた。金属に関係する地域の現地取材では、山や川、地形、地層、あるいは鉱物資源を探す目安として、金山羊歯とも呼ばれるヘビノネコザとかの発見などで、古代の金属産出の様子が彷彿とすることもあるという。

熊本での講義

前述のように、東北地方でも製鉄に関連する地名が多いことはあまり知られていない。ましてや他の地方ではまったく知られるはずもない。鉄や鉄文化は朝鮮半島経由の西回りルートしかないという刷り込みによる思い込みがすっかり浸透しているせいである。

太宰氏は以前熊本で「俘囚」をテーマに講演した際に、このたたら製鉄が東北で多かったことを話し、ロシア東沿岸部にある日本名・間宮海峡は「タタール海峡」と呼ばれている意味についても、「タタール」は「たたら」なのだと説明したところ、会場にいた三〇〇名から驚きの歓声が上がったという。

ヒッタイトから発信された鉄文化は、西回りルートとロシア東岸を経由して東回りルートで日本に到着し、伝わったという。そこにいた聴衆は初めて聞く話にみな驚いたことだろう。

それと、前回紹介した「蕨手刀（わらびてとう）」が熊本からも出土しているという。その蕨手刀は、東北出自のものであり、初期の蕨手刀の形態をしているとのこと。が、間違いなく東北から持ち込まれたものであり、刀だけが移動することはないので、古代に東北と熊本の間で人の交流があったことになる。

他方、「直刀」は朝鮮半島経由伝来のものである。鉄文化に関する限り、朝鮮半島経由の西回りとシベリア経由の東回りがあったのは事実であり、その後、東回りで誕生した東北の日本刀の源流となったのである。

また、この「俘囚」と「蕨手刀」の問題を照らし合わせると、『続日本紀』には、平安時代以前からの俘囚に関する歴史事項が記されている。また東北から他地域への一方的な移配だけでなく、関東や近畿地方から東北へ移配された人々もたくさんあった。

学校教育の意義

こうしたことがちゃんと証明されているのに、筆者を含め、多くの人々はまったく知らないだろう。太宰氏もあちこちの講演でお話されているのに、マスメディアも気づいていないのではないか。これでは、いつまで経っても社会に浸透することはない。

筆者のふるさとであるこの宮城・大崎地方で過去に実際にあったことなのだ。悔しくて、また残念でならない。学校でこうしたことを教えられていたら、どんなにか地元への誇りと知的好奇心を刺激されたことであろう。太宰氏も指摘されていたが、つくづく学校教育の大切さを痛感する。

状況はいまも変わらないだろう。少なくとも宮城や大崎地方の教育界ももっとこの歴史的事実について生徒に教える努力が必要ではないかと痛切に思う。

同時に、筆者もしっかり勉強して、当新聞からこうした歴史を発信して行こうと決意を新たにした次第であった。そうすれば、学校だけでなく、親から子へと、地域社会から子供たちへと伝えていく機会が増えていくだろう。

砂鉄か、鉄鉱石か

前号からの疑問のひとつに、当時の製鉄素材としては砂鉄なのか、鉄鉱石なのかという点があった。

この点については、太宰氏の知人が最近行った当時の製鉄技術復元では、砂鉄が原料であり、砂鉄から上質の「玉鋼」が出来るということである。

当時も現代の実験のような方法で「玉鋼」ができていたのであれば、すばらしい東北発信の日本刀の生産に直結していき、何らの疑念の入り込む余地もない。

さらに、東北は砂鉄だけでなく、鉄鉱石も産出していた。いまでも餅鉄と呼ばれる鉄鉱石を川から拾えるということで、太宰氏に現物を見せてもらった。手に取るとずしりと重く、鉄成分がたくさん含まれていると感じた。

鉄鉱石も東北にあり、鉄鉱石から「玉鋼」も生産していたかもしれない。

活発だった人的交流

それから、古代日本における東西の人的交流についても筆者の固定観念がもろくも崩れた。従来説によれば、弥生時代以降、朝鮮系渡来人が朝鮮半島から九州に渡来し、そこから全国に拡散した。そして最終的には東北にも進出してきたと教えられてきた。

しかし、これは事実と異なり、かなり硬直的な捉え方である。かつての交流はもっとダイナミックであり、さまざま地域、階層で活発な交流、行き来があったと推定されるとのことだ。

例えば、前記のような「俘囚」の交流、移動があり、後代、三陸沿岸部には平家落人伝説はいたるところにある。たたら製鉄の職人は他地域からたくさん流入していた。関東から宮城への移住も活発だった。また、紀州と三陸沿岸部も交流があった。

私見であるが、加えて伊勢で盛んな「蘇民将来」（注参照）思想も伝来していることも分かっているので、古くから伊勢地方との交流もあったようである。

（筆者注）伊勢市中心にしめ縄に「蘇民将来子孫家門」と書いた木札を付ける。その昔、旅の途中のスサノオノミコトが暴風雨で困っているところを、蘇民将来が助けた。ミコトは感謝し、疫病が流行るから気をつけるよう忠告し蘇民一家は難を逃れた。そこで疫病除けに「蘇民将来子孫家門」と書いて掛けるようになった。

再開発は現代の侵略

こうしたさまざまな情報をもたらしてくれる地名であるが、先ごろ全国規模で行われた市町村合併促進と土地区画再編成事業で、古くから伝わる地名がどんどん消えている。単に古い地名が消えているのではない。地名とともにそこに伝承されてきた古くからの歴史や文化も消されていることに気づく必要がある。

こうした再開発というのは、中央集権による現代版地方侵略とも言える。地名が残っていれば、その歴史をいつかは発掘できる可能性があるが、地名を消せば永遠にその土地の歴史、特に古い歴史は消えてしまう。いわば、歴史と文化の抹殺である。（前編　了）

「地名は知っていた　上下巻」
河北新報出版センター
各 840 円

「みやぎ地名の旅」
河北新報出版センター
840 円

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

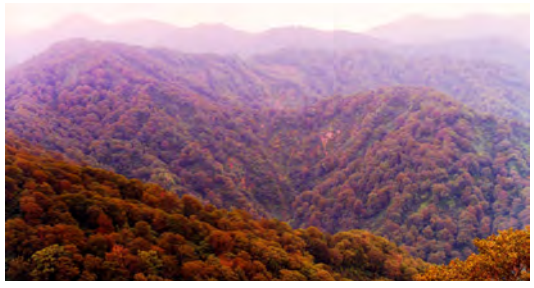
「一つの東北」の象徴としてのブナ

広すぎる東北を統合する象徴はあるか

以前紹介した野田一夫氏の「東北は広すぎる」との言葉を引くまでもなく、東北地方は広く、大きい。日本の面積の十七・七％、新潟県まで含めた東北圏では二一・〇％を占める。同じ東北と言っても、青森の人にとっては福島より北海道の方が親近感があるかもしれない。その福島の人にとっては青森より茨城・栃木・群馬の方が親近感があるかもしれない。そう考えると、「東北は一つ」と思っているのは東北の中の方にいる人間の感覚であって、他地域と接している人間から見ると必ずしもそうは感じられないものなのかもしれない。

地理的感覚だけではない。進もうとしている方向性にも違いがあったりする。以前げんさんがこの紙面でいみじくも書いていた通り、青森は震災後も原子力推進の立場であり、一方の福島は今も原発事故の影響が復興の最大の妨げとなっておりもちろん廃止の立場である。同じ東北でもこれだけ違う。道州制に対するスタンスも以前紹介したように、知事によって見解はかなり異なっている。

「一つの東北」を東北にいる人が等しく実感するには、東北に共通する何かを見つけることが必要であるように思われる。例えば、この欄で何度か取り上げている、日本の中世史に燦然と輝く平泉文化。これは岩手のものと言うより、東北の至宝である。なんとなれば、平泉文化の影響を受けた仏像や建造物、遺跡が、東北各地に存在するからである。このような「一つの東北」を象徴するようなものが他にも何かあるだろうか。


白神山地は見渡す限りのブナの森が広がる

世界遺産白神山地の意味するもの

平泉の文化遺産が世界遺産に登録されたのは震災のあった二〇一一年のことであるが、東北にはそれより先に世界遺産に登録された遺産があった。知っての通り、それは白神山地である。

青森県と秋田県にまたがる白神山地は、八〇〇〇年前の縄文時代から続くそのブナの原生林が世界的に見ても貴重なものであるとして、屋久杉で有名な鹿児島県の屋久島と共に、一九九三年に日本で初めての世界遺産として登録された。そのブナの森の面積は世界遺産の核心地域だけで一六九・七平方キロメートル、全体では実に一三〇〇平方キロメートルにも及ぶ。東京二三区の面積（六二一平方キロメートル）の倍以上である。特に核心地域に指定された地域はほとんど人の手が入っていないが、これだけの規模のブナの森が手つかずで残っているのは、世界的にもこの白神山地だけであるという。

このブナに代表される落葉広葉樹、日本では東日本に多く分布している。秋になると紅葉し、冬になると葉を落とす落葉広葉樹の森は、針葉樹の森や常緑広葉樹の森と違い、四季の変化に富んでいる。ブナの森は特にそれが印象的である。春の目にまぶしい新緑。夏のブナの葉の濃い緑。秋の見事な紅葉。冬の葉を全て落とし寒風に耐える凛とした姿。どの季節も見る者の心を掴むものがある。もちろん、私もブナの木は大好きである。

使い道のないブナの有用性

ところで、このブナ、漢字ではブナ、木へんに無と書く。木でない、木として使えるところがない、そのような意味合いであるそうである。確かに、木材としては腐りやすく曲がりやすく、なかなかに使い勝手の悪い材質である。それで各地に広く分布していたブナの森は次々に伐採され、代わりに木材として有用なスギなどが植林された。しかし、ブナの利用価値は、実は木材としての活用にあるのではない。

ブナの森は、ブナの木材としての利用価値の低さとは対照的に、豊かな恵みをもたらす森である。ブナの森には実に多くの動植物が生育している。ブナを始めとするブナの森の中の植物は秋に実をつける。その実は森に住む動物の貴重な餌となる。また、ブナは冬に葉を落とす。それは大量の落ち葉となって森の微生物の餌となると共に、腐葉土層となって堆積する。腐葉土層は雨水や雪解け水を蓄え、濾過し、ミネラル分を付加して、清冽な天然水をつくる。その水はもちろん、森に住む動植物の命の源となる。ブナの森が「天然のダム」と言われるのは、そのような理由による。東北では実に数多くの天然水が商品化されているが、そのうちの少なくない天然水はブナの森から湧き出している天然水である。ブナの森のブナが老いて雪や強風などで倒れると、キノコ類が分解し、その倒木は森の土の一部となってまた植物を育てる。そのような生々流転が、ブナの森では延々と続いてきたわけである。

我々の祖先もまた、こうした豊穣の森の恵みを得て生きていたと思われる。森に入って安らぎを覚えるのは、そうした先祖の遠い記憶が受け継がれているのかもしれない。

もちろん、東北にあるブナの森は白神山地だけではない。規模の大きなものだけでも、福島の奥会津一帯にあるブナの森や、岩手と秋田の間にある和賀山塊のブナの森も見事なものである。その他にも、岩木山、八甲田山系、八幡平、岩手山、早池峰山、森吉山、鳥海山、月山、朝日連峰、蔵王連峰、安達太良山、会津磐梯山、会津駒ケ岳など、東北の有名な山の山麓には大抵ブナの森が広がっている。

東北以外では、石川、岐阜、富山、福井の四県にまたがる白山山系のブナの森がその規模の大きさで有名である。白山信仰は東北各地でも広く見られるが、両者にはブナの森という共通性があるわけである。

バイオビジネスのフィールドとしてのブナの森

ブナの森の恵みは水だけではない。最近、バイオビジネスが持て囃されているが、白神山地は有用な微生物の宝庫である。その中で最も有名なのは「白神こだま酵母」である。一九九七年に発見された、太古から白神山地に住んでいるこの酵母は、通常のパン酵母より天然の甘味成分トレハロースを多く作るため、パンに添加する糖分を少なくでき、またさすがに冬の厳しい白神山地に生息しているだけあって、低温に極めて強く、冷凍保存しても生き延びるために、貯蔵や移送もしやすいというメリットもある。このようなことから、東北だけではなく各地でこの酵母を使ったパンが作られており、その味わいは好評を得ているようである。他にも、やはり低温に強く、雑菌を駆逐する力の強い乳酸菌「作々楽（ささら）」なども製品化されている。

また、白神山地ではないが、秋田県の別のブナの森からは、ビールを醸造するのに適した酵母も見つかっており、既にその酵母を使ったビールが、「ぶなの森ビール」として商品化されている。こちらのビールは、通常のビールよりも風味が爽やかでのど越しもよい。たとえて言えば、「森林浴」の印象である。

余談だが、東北でも特に秋田県はこうしたバイオビジネスに東北で最も熱心な印象がある。「白神こだま酵母」も「作々楽」も秋田県の外郭団体である秋田県総合食品研究センターが特許を保有している。同センターは他にも、秋田県内の地ビール醸造所と共同で桜の木から採取した天然酵母で地ビールを醸造するなど、官民一体でバイオビジネスを推進している。秋田にはまた、麹の元菌会社として全国の九〇％以上という圧倒的なシェアを誇る秋田今野商店のような企業もある。地ビールの醸造所を見ても、ここのビール酵母を使ってビールを作っている醸造所は数多い。今後の展開が楽しみな領域である。

東北人の目指す姿としてのブナ

東北にとってブナが親しみのある存在であることを示す事実がある。ブナを市町村の木と定めている自治体は全国に三一あるが、このうち東北六県と新潟で十四もある。東北圏だけで、全国の半分に近い数の自治体がブナを市町村の木としているのである。東北にとってブナがいかに身近な木であるかを如実に示すものと言える。

ところで、翻って東北を見ると、東北人は実にブナである。

この地に住んだ蝦夷はかつては人ではないと言われた。蝦夷は「えみし」と読む。また「えびす」とも呼ばれた。坂東の荒武者を「あづまえびす」と言ったが、これは恵比寿さまの「えびす」ではなく、「えみし」の意味である。人ではないと言われた蝦夷は、木ではないと言われたブナにそのまま重なるような気がする。

木材としては使いにくく、一見役に立たないブナの木が実は大いなる恵みをもたらす素晴らしい森をつくっているように、かつて蝦夷の住む地と蔑まれ、近世においても戊辰戦争での敗北が尾を引いて開発が遅れた東北を、未曽有の大震災でかつてないダメージを受けた東北を、そこに住まう我々一人ひとりが新たなものとしてつくり上げる、その象徴としてブナは相応しいように思うのである。

ブナは厳しい風雪に晒されてその身が樹氷となっても春に向けて力を蓄え、春になれば一斉にその芽を出す。ブナの新緑は一際鮮やかである。それは厳しい風雪に耐えたからこそのものなのかもしれない。大震災からの復興を目指す東北人にとって、ブナはまさにその範となる。ブナのようにしなやかにたくましく、使い道がないと蔑まれようとも動ぜず、一致して恵み豊かな森をつくる、その姿はまさに東北人が目指す姿そのものである。

ブナの緑は一際鮮やかである

執筆者紹介

大友浩平
（おおともこうへい）
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagma5/
Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

大友浩平氏

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

『庄内愛憎』

東北について、考えているのがとにかく楽しい。

書店に入っても、とりあえず郷土関連の棚に向かってしまう。郷土愛というには範囲が広すぎ、愛国心というには範囲が狭すぎるかも知れない東北偏愛ぶりを、半年以上本誌にさらけ出してきたが、かつては私ほどこの東北なる地を憎み嫌っていた東北人もいないだろうと自負もする。仙台在住の作家・熊谷達也氏もまた、育った地である宮城県登米市を嫌い、首都圏の大学へ進んだというが、私の場合そんなものではなく、もう大学進学の年齢までなど待てずに、十四歳で家出を企て十六歳で実行、東京などと言わず港からアメリカへでも密航しようとさえ思っていた。ただ当時三月で、まだ雪の壁であった山脈を前に気力を失い、断念したのだが（何故、すぐそこの酒田港や新潟港に向かわなかったのか・・やはりロシアよりアメリカだったのか）。冒険小説や映画の影響とはいえ正気の沙汰ではないが、私には今でも当時の自分の気持ちはわかる。内気で家族に対しても自己表現できず、ある日爆発してしまう、という思春期にありがちな話だが、これに庄内という風土が追い討ちをかけてしまうのだ。

奥羽越現像（おうえつげんぞう）氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル（ヴァイオリン）担当。

山形県民といえば、素朴で地味で保守的とイメージされるようだが、少なくとも日本海側の庄内地方は、そんな平凡な田舎観に甘んじない。山形人というより庄内人と自称する彼らは、心に爆弾を抱えているのだ。アジア圏の連盟を理想とし満州事変の立役者となった石原莞爾、抑圧社会の中に潜む孤高の魂の爆発を描いた藤沢周平、庄内平野の真ん中で地元産物による一流料理を展開する奥田政行。いずれも常識破りというか独創的というか、一種狂気と表裏一体の面々が揃っている。

彼らを生む風土とは何か。一つは、気候である。半年に及ぶ長い冬の間、荒れ狂う海に山野を舐め尽くす地吹雪。待ちかねたように爆発的に花が咲き乱れる春に、衝撃的に激しくも短い夏、そして哀しくも美しく染まり広がる秋、全てが強いインパクトを持ち、過激である。この自然を受け止める人々の姿は寡黙だが、その内には衝撃を受け止めて撥ね返す底力が蓄えられていくのだ。即ち自然は、人々の精神の鏡と言える。

次に、古代からの信仰である。もちろん信仰はどの地方にもあるが、庄内には縄文時代からの自然信仰が何故か大規模な山岳宗教地帯として発展し、東日本全域に影響力を持つに至った。絶大なる山河への信頼と畏れには、中央の常識など通用しない。むしろ自らの独創と信念こそが常識である、という考え方にもなる訳である。とは言え、少年時代の私の親不孝と無謀がその免罪符になる訳ではないが、過酷な環境への嫌悪と反発が、一部の多感な若者にとっていかに抑え難い衝動となるか、我ながら今も同情を禁じ得ないのである。

私の東北回帰は、以前本誌に綴ったように、岩手県を旅した事が契機であったが、東京から移り住んだ仙台では漬け物は庄内のものばかり食べ、庄内の言葉を話して暮らしている。それでも庄内まで居を移すまでにはいかない、という何ともアンビヴァレントな一東北人の姿がここにあるのだ。作家・藤沢周平は肺病治療の為庄内を離れ、思いがけず東京永住となったが、そのエッセイでは度々郷土庄内の事が語られ、後年は病身を押して東北各地を訪れた事が知られている。非才ながら物書きの端くれ、私もまた後続の一人として庄内を語る仕事を受け継いでいきたい。

「蝦夷の国」としての庄内

庄内ではないが、山形県東根市出身の作家・阿部和重の小説『ニッポニア・ニッポン』で、山形県出身の主人公が「俺、実は日本人じゃないんだ」と語る場面がある。「新潟と山形の県境に、日本国という名の山がある。古代、大和朝廷がここまで征服して『ここまでが日本だ』と宣言した所なんだ」という事である。

事実、「日本国」は奥羽三関の一つ、日本海沿いの鼠ヶ関から僅かに内陸にある、五五五メートルの山。名の由来には諸説あるが、日本国境説が正しいとしても、高橋富雄氏の唱えるように、「日本とは元来東北側、即ち蝦夷側の国名だったのを、大和政権がその国名ごと乗っ取った」のだとすると、果たしてこの山のどちら側を「日本」と呼んだものだろうか。いずれにしても、ここが大和・蝦夷両世界を分ける境界であった可能性は高いだろう。

ところが、では何故ここが境界なのか、という疑問には、満足な答に出会った試しがない。おそらく、強力な大和への抵抗勢力が存在したのだろうが、陸奥側の呰麻呂（あざまろ）や阿弓流為（あてるい）といった有名な蝦夷の存在が、この出羽側には殆ど伝えられていないのである。蝦夷遠征で知られる阿倍比羅夫は新潟方面の蝦夷からいきなり飛び越して秋田方面の蝦夷を討っているし、庄内に置かれたはずの出羽柵は半世紀も経たずして秋田へ移っている。一体、庄内の蝦夷はどうなったのだろうか。

実は、気になる古い伝承が、ある神社の由緒にある。鶴岡市内には上山王、下山王という一対の日枝神社があり、共にこの地方で最古の創建という。下山王の創建年代は不明だが、上山王は「用明元年、東北鎮護の為に創建」とされる。用明元年とは西暦五八五年で、出羽国建国が七一二年、新潟方面の対蝦夷城柵設置ですら六四七年である事を考えると、驚くべき古さである。つまりこの地が殆ど大和の勢力が及んでいない文字通りの蝦夷の国だった時代に建てられた事になるのだ。

用明天皇の先代が敏達天皇で、敏達十年（五八一年）は綾糟（あやかす）という蝦夷の頭領が大和（奈良）の三輪山に向かって、二度と天皇に逆らわぬ旨を誓わされた出来事が記録されている。中路正恒氏によれば、もともと蝦夷の地である大和国において、三輪山は天皇霊の拠所よりまず蝦夷自身の神体であり、綾糟は自分達蝦夷が侵略者に服従する事の許しを神に乞うたのだという（『古代東北と王権』講談社）。綾糟の出自については殆どわかっておらず、この服従の後、宮城県中部までの支配が進む事から、現在の仙台平野を拠点とする蝦夷だったのでは、と中路氏は説くが、私は鶴岡上山王の創建年代との近さから、あるいはまさに庄内のリーダーだったかも知れない、と秘かに考えているのである。鶴岡周辺には「蝦夷館」とか「蝦夷砦跡」といった場所がいくつかあり、いかに北東北よりアイヌ語地名が少ないなどと言っても蝦夷の地だった事は否定できないのだ。ところで、何故ここに日枝神社だったのか。おそらくこれも三輪山に似た事情で、日枝の総本山・比叡もまた元は蝦夷の神であり、また山の神である事から、強大な山岳信仰を持つ庄内との交信、融和、更に言えば同化を図ったものかも知れない。

しかし、「ここから先は異国である」と宣言された先の、庄内の人々には果たして民族の自覚はあったのか。蝦夷というような意識があったとすれば、それはいつの時代頃までだったのか。

蝦夷の末裔・平泉藤原氏が奥羽の覇者となった十二世紀、庄内は再び蝦夷の領土となった、と言えたかも知れない。三代秀衡が庇護した源義経が通った道として、念珠関（鼠ヶ関）や大宝寺（鶴岡市）、羽黒山の伝承があり、酒田市は秀衡の家臣団が移住し発展させた町としても知られている。義経の兄・頼朝が奥羽へ攻め入った際には、鼠ヶ関が改めて国境として戦場になっている。平泉の滅亡は、東北全体の蝦夷の時代の終わりとも言われるが、おそらくこの後鎌倉の御家人・武藤氏に始まり、最上氏、上杉氏と次々に外からの領主が入れ替わる事になる庄内でも、決定的な時代の転機だったに違いない。

徳川の時代となり、その譜代大名である酒井氏が入城して庄内藩となってから、現代に続く庄内の文化、庄内人のアイデンティティが培われていく事になる。しかし徳川との強い結びつきから、幕府末期には京都守護職の会津に対し、庄内は江戸の警護を任され、共に倒幕攻撃の矢面に立たされる事となる。薩摩長州主導の新政府軍との戦争では、またもや鼠ヶ関が激戦地となるのだが、特筆すべきは、奥羽越同盟諸軍の中での庄内軍の例外的なまでの負け知らずの強さであった。その要因は、北前船での海運業で奥羽一の豪商となった本間家の財力による、アメリカからの新式銃大量購入や、藩内元来の教育水準の高さにあったと言われる。同盟敗戦後も西郷隆盛の厚遇によって奥羽他藩のような辛苦は避けられたが、明治から昭和にかけて経済発展の波からは取り残され、陸の孤島と化していく。

◇

近年、蝦夷を題材とした小説や『東北学』の刊行によって、人々の「蝦夷」への眼差しに変化が起き、自ら「蝦夷の末裔」である事を誇る、という、昔なら考えられなかった傾向が見られるようになった。例えば前述の熊谷氏は、自らの顔立ちや体質を縄文人的（アイヌ的？）として、蝦夷の血筋である事を度々示唆しているのだが、私の場合は、かなり違う。庄内の海岸沿いは元来北陸の能登方面からの移民が多く、そもそも出羽一帯は古代より大陸との交流で陸奥側とは異なる混血の歴史を持っている。私自身、家伝によれば四百年前に広島地方より渡ってきた一族だと言う。もちろん四百年の間に縄文的気質の強い地域との婚姻もあったが、蝦夷＝縄文人という図式がどこまで正しいのかは不明だし、縄文的な顔立ちだろうがなかろうが、現代の殆どの庄内人にとって、蝦夷とは非現実的な概念である。

熊谷氏とは逆に、自ら縄文人的ではなく、血縁的にも西日本の出自である事を認めながら、誰よりも早く蝦夷という視点での東北復権を小説で表したのが、岩手県在住の高橋克彦氏である。氏は言う、「蝦夷は血ではない。土が作る。」つまり、東北に生まれたり、育ったり、暮らしたりする者が即ち蝦夷なのだと。京の貴族が出自である平泉藤原氏も、関東武士の子孫・伊達氏も、中央より蝦夷として扱われてきたが、当人達もまた、自ら立つ土に生きた先人の存在を感じながら、「中央の者とは違う」己を自覚したのではないだろうか。

庄内の歴史の大筋を見ると、この地の蝦夷意識は長い年月の畳み掛けるような支配の積み重ねで雲散霧消したように思われる。しかし幕末に善戦した庄内人の身体には、中央の名を騙る権力との戦いの宿命、蝦夷の魂が甦っていたのではないか、とも想うのである。

◇

今回、本当の地元の事なので仙台の事以上に思い入れを込めたが、それでも庄内は未だ愛憎半ばで、自分の中で折り合いのつかぬ地である。しかし今後ますます東北各地の人が、各々の地元を語っていかねばならぬ時代だと思う。そして同時に、現在ＮＨＫ大河ドラマ『八重の桜』を会津・福島の人々だけでなく、仙台や庄内、東北中が自らの事のように感じながら注目しているように、それぞれの物語に共感し、時に衝突しながらも結び合う時なのだと思う。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

シリーズ　遠野の自然
「社」
遠野 1000 景より

黄金色一色

落ち葉と社殿

自然木の鳥居　荒川にて

おっけそうな鳥居

山中の鳥居

昨年の九月十五日、十六日の二日間、「遠野まつり」を取材したことは当新聞第五号でもお伝えしました。筆者はあの祭で初めて遠野を訪問したのですが、一気に遠野の魅力に取りつかれてしまったことを白状します。またその訪問をきっかけにして知り合いの方も随分増えました。そうしたことから、遠野との不思議なご縁も感じます。

しかし、「遠野まつり」の魅力もさることながら、あそこには何か人を惹きつけてやまない何かがもっともっとあると直感しました。それが何なのかはそのときはまったく分かりませんでしたが、確かに感じました。

分からないのは当然といえば当然です。たった二日間で遠野が分かるはずもないのですが、遠野のまちのベース音のようなものを感じたと思いました。

はっきりとその正体が分からないモヤモヤした状態のところに、ｆａｃｅｂｏｏｋで「遠野一〇〇〇景」というニックネームの方が遠野の写真を定期的に掲載されているのをたまたま見かけました。以前に抱いていた「遠野には何かがあるという予感」がこれらの写真に出会ったことで、よりはっきりした形を取りはじめました。しかし、言葉ではうまく表現できません。できませんが、自分では自然に納得できました。

でも、この自分の楽しみを独り占めにしているだけでいいのだろうか、他の人にも見せてあげることができたらどんなにか感謝されるだろう。そうしたことも勝手に思いはじめました。

いろいろ考えた挙句、思い切って、「遠野一〇〇〇景」さんに、写真を拝借して新聞に掲載することを申し出てみようと思い立ちました。新聞読者には、遠野の魅力を言葉でいろいろ表現するよりも、百聞は一見に如かず、写真をお見せするのが一番であり、申し出てみるしかないと決意しました。

恐る恐る当方の身勝手なお願いを申し出たところ、意外や意外、あっさりとご承諾いただいたという次第。それで、この新企画が誕生しました。

◇

初回の今回は「社」というテーマです。「社」に関する八枚の写真を掲載いたしました。読者の方々はこれらの写真からどういったメッセージを受け取られるか非常に興味深いところです。

自然木の鳥居。イチョウの落葉と神社。参拝するのも大変だろうと思われる山中の鳥居。さびれて朽ちかかった鳥居など、さまざまな鳥居、社があります。

「社」に関する写真は、実はこれだけではありません。もっとあります。でも初回はここまでにします。この先の楽しみにしていただきたいと思います。

それから「社」以外にも多くのテーマ別の写真があります。これらをシリーズにして、読者の皆さんにじっくりご覧に入れようと思っています。

写真を見て、筆者と同様に遠野の魅力に取りつかれた方は、ぜひ遠野にお出かけください。そこには、当然のことながら写真の風景もあります。さまざまな祭もあります。普段は絶対にみかけることのない動物もいます。遠野の自然がいっぱいです。

それから「遠野物語」の世界も拡がっています。遠野に行けば、そこが日本のふるさとと言われる所以がきっと納得できることと思います。

しかし、この遠野は「観光地」ではありません。したがって観光客にも媚びたりしません。春夏秋冬に行われるさまざまな郷土の祭りも、観光客に見せることを目的としたものではありません。神社に奉納される祭がメインなのです。そこをまえもって理解したうえで遠野を訪れることをおすすめいたします。

宮守町　駒形神社

陰鳥居の親

陰鳥居

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

三陸特産物復興支援

支援活動始動！

海産物と日本酒篇

石巻の牡蠣と石巻の日本酒のイベント

①【石巻の牡蠣と石巻の日本酒のイベント】開催

前号（第九号）で予告した「三陸特産物復興支援企画第一弾トライアル」として、【石巻の牡蠣と石巻の日本酒のイベント】を三月二日（土）に高田馬場のお好み焼き屋「まる現」で開催。

開催にあたっては、ボランティア団体「石巻復興プロジェクト」の協力をいただいた。当新聞はまったくの門外漢での実施であったが、無事終了できたのはこの団体のおかげである。ここに謝意を表したい。

料理は焼き牡蠣、ムール貝、お好み焼き類、日本酒は石巻の地酒、『日高見』と『墨廼江』だった。

事前予想に反して、当日は十八名の参加をいただいた。参加者は多士済々で、主催者が新聞ということでもないが、新聞関係者が多かった。参加された方々にここで謝意を表したい。

このイベント実施により多少開催ノウハウを獲得したとうぬぼれ、現在「三陸特産物復興支援企画第二弾」を企画中である。

また、このイベントに先立ち、二月二三、二四日の二日間、宮城の日本酒探訪に出かけた。ちょうどいまは新酒の季節であり、仙台市内ではいくつかの新酒利き酒会が開催されていた。

併せて、牡蠣料理も探訪した。三月二日のイベントを開催するにあたり、いかに素人とはいえ、何も語れないのでは情けないと急遽仙台を訪問したという次第。

②吹雪の【THE漁師祭り】

二月二四日（日）に仙台では「THE漁師祭り」が開催された。猛烈な吹雪の中での開催だったが、何人かの知人にも会えた。新たな出会いもあった。「渡波オイスターズ」のブースでいただいた牡蠣フライは絶品。また、前日に訪問した「かき小屋飛梅」のスタッフにもお会いした。

③【新酒地酒と酒の肴まつり】

仙台訪問期間中、駅構内で開催されていたが、東北各県の新酒と酒の肴があった。すべての新酒を利き酒は出来ず、宮城の酒だけをいただいた。牡蠣料理のバリエーションはお薦め。

④かき小屋飛梅 仙台駅前店

ここでは牡蠣料理尽くしと日本酒の組合せを試した。石巻産の生牡蠣、牡蠣の塩辛、牡蠣のオリーブオイル焼き、牡蠣フライ、そして「乾坤一」という宮城の酒にも出会った。日高見も当然頂戴した。安くておいしい。店長さんはじめスタッフと楽しい交流が出来た。

⑤利き酒会はしご

前記の仙台駅構内での利き酒だけでなく、全国に有名な「浦霞」の利き酒会にも参加、さらに駅前近くのアーケードでの「宮城の純米酒　試飲会・即売会」にも参加。何種類いただいたか忘れてしまった。被災して再開したかどうか気がかりだった気仙沼の男山本店のお酒が出ていて安心した。「蒼天伝」である。おいしかった。最後はステーキの伊勢屋でいただいた石巻の酒・墨廼江・大吟醸。うまい。でも飲みすぎである。

吹雪の仙台での THE 漁師祭り

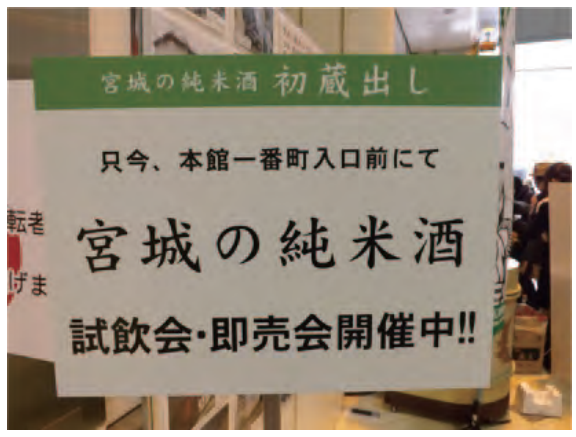
渡波オイスターズ面々

絶品の牡蠣フライ

仙台駅での新種地酒と酒の肴まつり

かき小屋飛梅の面々

牡蠣料理ラインアップ



宮城の純米酒試飲会

宮城の酒

かき小屋飛梅仙台駅前店スタッフ

石巻の墨廼江　大吟醸

浦霞　利き酒会

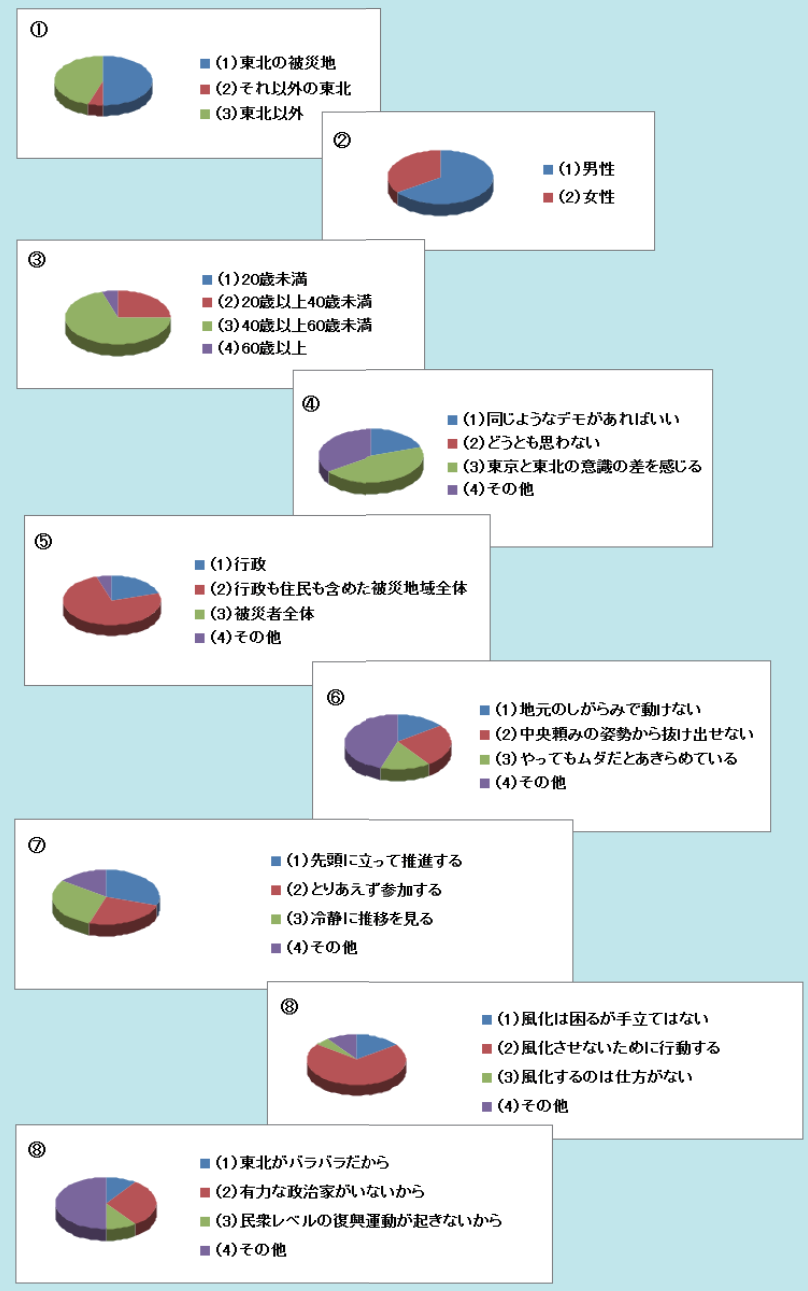
牡蠣尽くし　生、塩辛、オリーブオイル焼き、宮城の酒・乾坤一

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.

第9号　ネットアンケート集計結果

【　東北全体での復興運動が発生しない理由　】

No.	質問と選択肢	回答数
①	現在住んでいる場所	
	(1)東北の被災地	10
	(2)それ以外の東北	1
	(3)東北以外	9
②	性別	
	(1)男性	13
	(2)女性	7
③	年齢	
	(1)20歳未満	0
	(2)20歳以上40歳未満	5
	(3)40歳以上60歳未満	14
	(4)60歳以上	1
④	東京で行われている反原発デモについてどう思うか?	
	(1)同じようなデモがあればいい	4
	(2)どうとも思わない	0
	(3)東京と東北の意識の差を感じる	9
	(4)その他	7
⑤	東北復興の『第一の推進役』は誰であるべきなのか?	
	(1)行政	4
	(2)行政も住民も含めた被災地域全体	15
	(3)被災者全体	0
	(4)その他	1
⑥	なぜ東北では内部から復興運動が沸き起こらないのだろうか?	
	(1)地元のしがらみで動けない	3
	(2)中央頼みの姿勢から抜け出せない	5
	(3)やってもムダだとあきらめている	3
	(4)その他	9
⑦	もし東北全体の復興運動が起きたらどう対応するか?	
	(1)先頭に立って推進する	6
	(2)とりあえず参加する	5
	(3)冷静に推移を見る	6
	(4)その他	3
⑧	東北大震災の風化問題についてどう考えるか	
	(1)風化は困るが手立てはない	3
	(2)風化させないために行動する	14
	(3)風化するのは仕方がない	1
	(4)その他	2
⑨	東北復興が進まない真の理由はなにか?	
	(1)東北がバラバラだから	2
	(2)有力な政治家がいないから	6
	(3)民衆レベルの復興運動が起きないから	2
	(4)その他	10



今回は、微妙な問題だが、東北全体での復興運動がなぜ発生しないのか、その理由についてお聞きした。

前々から気になっていたし、不思議でならなかった。東北六県がすべて同じ利害を有している訳ではないことは百も承知だが、なぜ東北全体を巻き込む復興運動が起きないのだろうか。これだけ復興が遅れているのにみなで立ち上がらないのはなぜだろうか。とても不思議だし、どこに原因があるのか、このアンケートで手がかりをつかみたかった。二〇名のご回答があった。

まず、東京を中心に行われている反原発デモとの関係についての質問では、東京と東北の意識の差を感じるとの回答が45％。東北復興の推進役についての質問には、行政も住民も含めた被災地全体という回答が圧倒的で75％。東北内部から復興運動が沸き起こらない理由については、意見は細切れに別れ、その他が45％で最も多かった。ここはもっと掘り起こしが必要だと思う。もし東北全体の復興運動が起きたらどうするかは、先頭に立って推進、とりあえず参加、冷静に推移を見ると意見が三分した。風化問題は、風化させないための行動をするを選択したのが70％。復興が進まない理由のトップもはその他が50％。次いで多いのが、有力政治家不在が30％。

なぞの解明は未解決だ。

編集後記

震災から満二年のイベントも終了した昨今、イヤな話が聞こえる。主に関東・関西のボランティアと東北住民との意識のズレが表面化しているらしいのだ。

ある宮城出身で在住の知人が言う。一生懸命なのは県外の人で、関東など故郷を離れている人が支援に一生懸命。全国組織ボランティア団体の懇親会で中心メンバーから『遠くから来た人が頑張ってくれているのに』と宮城県民のまとまりのなさを嘆く声あり。また、別のフォーラムで大学教師が宮城の学生のボランティアに対する消極性を嘆く声あり。東京や関西と比較して明らかに意識が低く、『地域性の問題かもしれない』と言われガッカリしたと知人が嘆く。会場には年配者ばかりで、『宮城の人は一生懸命やっているのか』と地元の人からの意見あり。他の質問者は関西や関東の人ばかり。岩手からの参加者は宮城はまだいいほうだとも。沿岸被災地で一生懸命ボランティア活動している人ほど現実と任務のギャップに苦しみ、限界が近づいている方もいるようだと。三月で撤退・縮小の団体も多いとのこと。

こうした話がほんの一部であることを祈りたい。しかし前号のアンケート結果も何か符合するところがあるようにも思えてくる。

革物屋（かわもんや）WEB完全リニューアル（WEBを移動しました）

http://www.birthday-press.com/（バースデイプレス）→「小物のカテゴリー」→「レザー」

ミニバッグ Handy Second

持っていたくなる革バッグ。インナーバックとしてもお使いいただけるセカンドバック。革は薄めの柔らかなものを使用し、手触り感を重視いたしました。内側は耐久性のある光沢ナイロン製布を使用。

ミニバッグ Tiny Dice

用途ご自由の四角いケース。重量 40g と比較的軽量な製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバックに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。

ミニバッグ Tiny Log

用途ご自由のまるいケース。重量 40g と比較的軽量な製品ですので、携帯ストラップ用としてお使いいただくもよし、大きなバックに吊り下げていただくもよし。また、中に贈り物をつめてプレゼントケースとしてのご利用も一考かと。使い方は工夫次第。

モバイルバッグ Beans L

レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バックは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バックはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバックも多くはなかったようです。Beans L は、その両方でご満足いただけるバックです。

モバイルバッグ Beans S

レザーでオールマイティ、両方のご満足。これまで、オールレザーでお手頃価格のモバイル端末用バックは多くありませんでした。また、各モバイル端末専用バックはありましたが、どの端末でも収納可能なオールマイティバックも多くはなかったようです。Beans S は、その両方でご満足いただけるバックです。

モバイルバッグ Handy Pouch

あなたにお供するポーチ。持ち運び可能で、デスクやテーブルに置いて開け閉めできるポーチ。上下蓋部分の内側にスポンジを挟み込んでおりますので、モバイル端末機器の付属品の収納にもお使いいただけます。

【東北復興】掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁止します。Copyright YUMUYU INC. All rights reserved.